

JA北九 大葉春菊出荷組合

生産者数：21名

出荷先：北九州青果、

作付面積：2ha

全農ふくれん 他

作付品種：大葉春菊

農家独自の取り組みが産地の取り組みへと拡大

JA北九 大葉春菊出荷組合は、昭和の時代から大葉春菊の生産を行ってきました。もともと、小倉南区は葉物野菜をメインに生産する農家が多く、大葉春菊を作り始めたきっかけも農家独自の取り組みから始まりました。その食味の良さから、生産する農家が徐々に増え小倉南区が大葉春菊の産地として確立しました。

次世代が舵をきる

令和になってからは、親元就農や新規就農した若手農家が増え、次世代農家の集まり「若手の会」を設立しました。ベテラン農家からこれまでの栽培方法などが引き継がれたと同時に、若い主婦層や子どもにもっと食べてもらえるようなブランド化に取り組んでいます。



1 農家が厳選した「品種」

北九州市小倉南区では、昭和20年代半ばには一般的なみのある春菊が栽培されていました。その後、農家が独自へと選抜を進め、平成29年にJA北九大葉春菊出荷組合で寄った品種の中から、最も美しい形質を持つ品種を選び、かつて大葉春菊は「ローマ」と呼ばれ、地元の消費者から親しまれてきましたが、春菊離れが進んでいる若い世代や子どもたちにもほしいという願いから、方言の「うまか」を取り、令和6年から「うまかるーま®」として再出発しました。



2 「食味」へのこだわり

うまかるーま®は春菊特有のも美味しく食べることができ、原因物質の一つであるシュウ酸は土壌中のカリウムが多いと植物体内に多く蓄積する。出荷組合では土壌分析により保つように取り組んでいます。

葉に刻丸い春菊員各自で持ち抜きました。親しまれてきまおいしく食べて「うまかるーま®」のえぐみが少なく、生でるのが特徴です。えぐみの酸は土壌中のカリウムがすることが分かっており、当り土壌中のカリウム量を適正に保つように取り組んでいます。



3 「土地」の魅力を最大限に活用

北九州市が有する広大な竹林のほとんどは、放置竹林であるといわれています。当出荷組合では地元北九州の放置竹林で伐採された竹から作られた「竹パウダー」を土壌改良剤として活用することで、環境に優しい農業を目指しています。

